1998 年 10 月 9 日第三種郵便物認可　（毎月 3 回 8 の日発行）
2017 年 11 月 22 日発行　SSKU　増刊通巻第 5939 号

NPO 法人わくわくかん
編集　〒115-0044
東京都北区赤羽南 2-6-6
TEL：03-3598-3337

シャケ Zo くん

SSKU わくわくかん リボン便り

http://www.wakuwakukan.net/

2017 年 12 月号　No.201

？？なぜリボン？？

生まれ変わった
再生したという意味の
（Reborn）。
新しく生まれ変わる
「便り」にしたくて、名付けました。

11 月 2 日に「友愛ホームサービス」のサポートスタッフ養成講座が開催されました。講座では、わくわくかんのスタッフが講師となり「精神障がいを知ろう」というテーマでこれからサポートスタッフを目指す講座を実施しました。

北区社会福祉協議会主催の
友愛ホームサービスサポーター養成講座開く

友愛ホームサービスとは、高齢者や障がい者の自立した生活のために地域住民が支え合いの気持ちで家事や外出などのお手伝いを行う有償の在宅福祉サービスです。6 名の受講者の方は、精神障がいをお持ちの方と関わった経験がないとのお話でした。まず、始めの 1 時間は精神障がいの中の主な病気の説明を行いました。統合失調症やうつ病、そして発達障害について解説を行いました。受講者が一番気にされていたことは、接し方についてでした。

・ご本人の話すペースを大切にし、穏やかな口調で接すること。
・沈黙になっても無理に話さず、黙っていることにも意味があるため大事にすること。
・説明は要点を伝え、情報が多くならない配慮が必要であること。
・お手本や紙に書くことで分かりやすく伝わること。等を、皆さんは興味深く聞いていらっしゃいました。

精神障がいの理解を深めるために

2 時間目には、施設見学を行いました。まず、当法人の就労移行支援事業所「リボーンプロジェクト」を見学しました。訓練生 3 名の方に、今オフィス内でどんな業務を実施しているかを説明して頂きました。急な声掛けにも快く説明を引き受けて下さった訓練生は、入力業務の状況、文書作成の様子を教えて下さいました。その後、自立訓練事業を実施している「ボランティア響会」の見学を行ないました。こちらでは利用者の T さんが、ご自身の 12 年間の入院生活から地域へ退院し、現在は実家で一人暮らしをしていることについて、体験談を話されました。まず、ご自身の退院に関わった職員の方に向けて感謝の気持ちを述べられていました。そして、地域で暮らしていて良かったことを伺うと、「自由気ままに過ごせることが良いですね」と笑顔で語った T さん。自由に外出できることが、入院生活との大きな違いのようです。近くの商店街に好きな総菜を買いに行くことや、家で自由にテレビを見られることが楽しみとのことでした。また、日ごろ、ヘルパーさんと部屋の掃除をしたり、通院に同行してもらえることは非常に助かっていると話されていました。

最後の 1 時間は、事例検討会をしようかと考えていましたが、T さんのお話を聞いた受講者の方々から積極的な質問、ご意見が挙がったため、ざっくばらんに意見交換を行う時間としました。サポーターとしての関わり方、こんな時にはどうしたら良いか、関係機関との連携はどうしていけば良いのか等、活発な意見交換がなされました。途中、北社協の職員の方からも説明のフォローを頂き、受講者の皆さんにとって精神障がいへの理解を深める良い機会となったようです。

今回、私は初めて講師を務めましたが、受講者の方には精神障がいとは決して特別なものではなく、身近な疾患であることを感じて頂けたかと思います。今後、支援の現場でサポーターとなった受講生の皆さんと再会できたらと思います。皆さんのご活躍を期待しています。

（スタッフ K）

＜わくわくかん 12 月予定表＞

- ✧ 12 月 01 日（金）～2 日（土）第 7 回日韓社会的企業セミナー　ソウル市
- ✧ 12 月 02 日（土）～3 日（日）第 35 回北区障害者作品展　障害者福祉センター
- ✧ 12 月 09 日（土）はたらっくす 16:00～（自立訓練室）
- ✧ 12 月 18 日（月）現場協議会　16:30～（スカイブリッジ）
- ✧ 12 月 19 日（火）家族懇談会　16:00～（自立訓練室）
- ✧ 12 月 26 日（火）わくわくかん全体忘年会～地域と共に～　18：00～赤羽会館大ホール

1998 年 10 月 9 日第三種郵便物認可　（毎月 3 回 8 の日発行）
2017 年 11 月 22 日発行　　SSKU　　増刊通巻第 5939 号

わくわく配食サービス

就労継続支援 A 型事業
北区赤羽南 2-6-6
TEL：03-3598-0089
FAX：03-3598-0089

目指している活動の中にこそ解決
～今年をふりかえって～

早いもので、もう今年も最後の月 12 月になりました。今年は、年明けから「すぐに、また年越しですよ。（笑）」などと笑い合い、でも妙に的を得ていると感じたりした年の初めでした。この言葉通り、寒い季節になり今年一年を振り返る月になってしまいました。

今年の４月の厚生労働省の就労継続支援Ａ型事業所の指定基準などの見直しがあってから、そのことに振り回されそうした記事が多かったと思います。

今月は、初心を思い出しわくわく配食サービスの開設当時の経緯などを書きたいと思います。旧自立支援法が出来てすぐ、「就労移行支援事業所」を開設し 100%の就職を目指していました。しかし実際は、一般企業で働けるチャンスに恵まれない方もあり法人の理念「障がいのある方もない方も共に働き・共に生活する」に基づいて「就労継続支援Ａ型事業所」を開設しました。

そういう経緯もあり、オープニングスタッフは、「就労移行支援事業所」と「就労支援センターの登録者」がほとんどでした。就労支援センターの登録者は、一般企業で働くことを希望し努力を重ねた方々もいらっしゃいました。

障がいを負っても自分のできる働き方で生活することをあきらめないことを、少しでも応援したいという法人としての思いだったと思います。

配食サービスは、「障がいの方と共に働く場所」と同時に、お弁当をお届けすることで地域の高齢の方や障がいの方のお役に立てればという目標がありました。開設当時は、その他サービスとして電球を交換する、買い物をするなど簡単な家事を行う（30 分 500 円～）で行っていました。

さらに計画では、お花見など季節のイベント、健康体操など講座など開催することでより地域の方の交流の機会を提供しわくわくかんの強味である相談スキル（就労相談、生活相談など地域の情報も含めてお伝えする）を生かしてより地域の方のお役に立てることを目標としていました。目標の通りには、なかなかできないのですが「いろいろな夢を抱き開始した事業です。」初心にかえり、開設当時の思いを実現するにはどうしたら良かったのか振り返る年の瀬にしたいと個人的には考えているところです。また、厚生労働省の動きに振り回されずに、自分たちの目指している活動の中にこそ解決策があるのではないかと自問自答しています。　（C.N）

【材料】　４人分
白菜――5 枚
合いびき肉――200ｇ
たまねぎ――中 1/2 個
しいたけ――3 枚
パン粉――大サジ 3
牛乳――1／2 カップ
塩――小サジ 1/3
ビーフスープだし汁―2 カップ

はくさい

白菜と肉の重ね煮

【作り方】
① 白菜を５枚はがして、さっとゆでておく。
② たまねぎ、しいたけはみじん切りにする。
③ 合いびき肉、②、パン粉、牛乳、塩を混ぜ合わせてこね、４等分にしておく。
④ 白菜を広げ、③をぬりつけるようにして全体に広げる。上に再び白菜を広げ（逆向きに置く）、肉にくっつくように押さえる。
⑤ その上に肉をのせ、これを繰り返す。
⑥ なべにだし汁を入れてよく煮込む。
⑦ 適当な大きさに切って皿に盛る。大なべがない場合には、白菜を 1/2 にしてからやってもよい。

ビタミンＣと食物繊維などたっぷり

白菜の大部分は水分ですが、ビタミンＣが多く、風邪の予防や免疫力アップに効果的。カリウム、カルシウム、マグネシウム、亜鉛などのミネラル類を含みます。とくにカリウムには利尿作用があり、塩分を排出する働きがあるので、高血圧予防にも役立ちます。

食物繊維が豊富かつ低カロリーなので、整腸やダイエット、美肌作りにも効果が期待できます。

年末年始のお休みのお知らせ　12 月 28 日～1 月 3 日

1998 年 10 月 9 日第三種郵便物認可　　（毎月 3 回 8 の日発行）
2017 年 11 月 22 日発行　　SSKU　　増刊通巻第 5939 号

自立訓練（生活訓練）事業 ボランティア響会

通称 響（ひびき）

〒114-0032　北区中十条 1-2-18
北区障害者福祉センター4F
TEL 03-5963-6888

＜外出報告＞羽田空港

10 月 18 日の外出先は羽田空港でした。障害者センターから王子駅まで行きました。王子駅から京浜東北線で浜松町に到着して、それからモノレールで羽田空港第二ターミナルビルまで行きました。

到着した時間は 11:30 くらいでしたのですぐ食事をとりました。和食とベトナム料理の店に分かれて、我々はベトナム料理のフォーというお米を麺にしたものを食べました。あっさりした味わいで良かったです。その後第二展望デッキで飛行機を見ました。

そこで記念写真を撮りました。飛行機が背面に写るようにとったのですが、中々上手くいかず大変でした。しかしたくさんの飛行機を見れたので大満足でした。その後に少し休んで第 1 展望デッキでも飛行機を見たのですが、第二とは違った良さがあって楽しかったです。それからおみやげを買って、モノレールに乗って、京浜東北線で帰りました。今回の外出は、とても充実した外出でした。

（K.O　S.W）

紅葉のもみじ　（K．W）

（K.S）

♪＜歌合戦報告＞𝄞

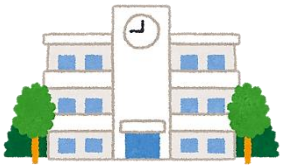
今年の歌合戦は赤羽会館で行われました。前回優勝の「わくわくかん」は連覇がかかります。しかし前の団体が現われず、順番が急きょ繰り上がるというハプニングに見舞われました。その上高橋克典を歌う予定の人が体調不良で欠席、というピンチの連続。3 番目、順番が巡ってきました。S さん K さん、スタッフ K さんの司会で、Mr.Children、尾崎豊と続き、いよいよ choo　choo Train。普段の練習通り、まとまり感の有る出来映えでした。全てのプログラムが終了し、いよいよ結果発表。しかし接戦の為集計に手間どるというハプニング。スタッフ A さんが駆け回ります。ようやく 16 時近くに結果発表。結果は「オハナ」の AKB とわくわくかんは、同点優勝。悲願の V2 達成となり今年の歌合戦は無事終了しました。お疲れ様でした。　（Y.H　A.K）

プログラム紹介
＜リラクゼーション＞

ひびきのプログラムには、「リラクゼーション」というものがあります。リラクゼーションは別館の和室で通常金曜日の午後におこないます。スポーツのプログラムの後にする事が多いので、スポーツの疲れがとれます。心はリラックス、体はヨガのような事をします。最初は柔軟体そうをして、その後横になって筋弛緩法などをやり、後半は、ヨガのポーズをやります。最後は 2 人 1 組になってマッサージをしあいます。人によりますけどマッサージはとても気持ちがいいです。リラクゼーションの時間では自分の体がかたいと痛感します。しかしとてもリラックスでき、心も体もリフレッシュできます。　（H.T）

1998 年 10 月 9 日第三種郵便物認可　（毎月 3 回 8 の日発行）
2017 年 11 月 22 日発行　　SSKU　　増刊通巻第 5939 号

就労移行支援事業
リボーンプロジェクト
〒114-0032　東京都北区中十条 1－2－18
北区障害者福祉センター４F　Tel：03-5963-6888



初めての外部からの『受託業務』

1,814 部の入力で多くの訓練効果

10 月 13 日～11 月 10 日までの約 1 ヶ月間、北区の教育委員会からデータ入力業務の依頼を受けました。北区内の小学校 20 校の 1 年生･2 年生を対象とした、夏休みで乱れてしまった生活リズムを妖怪退治をしながら元に戻すための取り組み冊子で、内容を見ていると自分たちもやってみたいという声もちらほら。ダメージを与えないと体力が回復する仕組みなので、倒せないボス級の妖怪ができあがる可能性もありますが…。

当初の予定では、約 2,000 部と聞いていたので 1 日 100 件ペースで入力を進めれば、チェック作業も業務の中で出来るかなと思っていましたが…実際に届いて入力を開始すると、思ったよりも入力件数は延びず、気付けば入力に追われる日々でした。最終的には、リボーンの訓練生だけでなく、ひびきの利用者さんにもご協力いただき、そしてスタッフと総動員でひたすら入力に追われましたが､11 月 10 日に依頼された 1,814 部の全ての入力を終えて無事納品することが出来ました！

リボーンにとって、今回が初めて外部から受託を受けて業務を行いましたが、普段の業務と違い、皆さん緊張感を持って取り組んでいらっしゃいました。それだけでなく、ほとんどの方が納期直前にはミスの件数も激減し、想像以上の訓練効果も見られました。1 ヶ月で約 2,000 件のデータ入力は大変でしたが、たまには外からの刺激も良いものだなと思った 1 ヶ月間でした。

＜受託業務をやりとげての感想＞

①どんなことが大変でしたか？また、気をつけたことはありますか？

- ミスをしてはいけないので始めのうちは緊張しながらチェックをしつつ作業していました。
- 入力して、なおかつ空欄のページにはふせんを貼らなければならないので、物忘れの激しい私には大変頭を使う作業でした。(K.M)
- 間違いがないかチェックするのが大変でした。(K.Y)
- 色や番号、記入内容に気をつけました。(U.F)
- 気をつけていたところは、間違いないか見直しをしていました。(S.A)
- 小学 1,2 年だったので字が読めないことがあった。(I.Y)
- 汚れや傷などを付けぬよう、丁重に扱うように気を付けました。(K.S)

②受託業務を行っての感想をご記入ください

- 疲れましたが、ある意味で良い刺激となりました。(K.M)
- 色々と大変でしたが、とてもいい経験になりました。(K.Y)
- 教育委員会の仕事の一つにこういうことをやるのが少し理解できたと思います。(U.F)
- 細かい業務でしたが、やっていてやりがいがありました。１ケ月が早く感じました。(S.A)
- やりがいのある業務でした。(I.Y)
- しめきりを意識して急ぐあまりにミスをしてもいけませんので、信ぴょう性にもつながりますし、そこらへんも大変だなと思いました。(K.S)

ひさしぶりに＜席替え＞

9 月から 10 月にかけて、リボーンでは卒業や新しく入る方等、人の入れ替わりがあったので、11 月 4 日に久しぶりの席替えを行いました。

訓練生だけでなく、スタッフも座席替えをしたので、見た目の印象がガラリと変わりました。席替えしたばかりの頃は、前の席に戻ろうとする方もちらほら見られましたが…。新しい席で心機一転、訓練に集中してもらえたら良いなと思います。

1998 年 10 月 9 日第三種郵便物認可　（毎月 3 回 8 の日発行）
2017 年 11 月 22 日発行　SSKU　増刊通巻第 5939 号

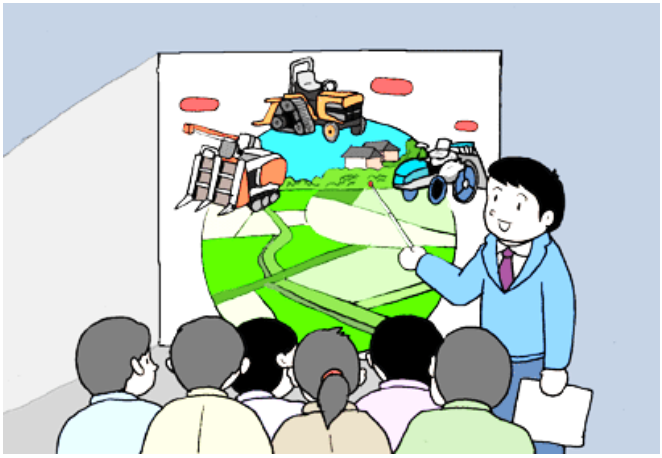
第 8 回　わくわくかん　家族懇談会のお知らせ

開催日時：　2017 年 12 月 19 日（火）16:00～
場　　所：　障害者福祉センター4 階　自立訓練室
内　　容：　懇談会
個人面談：　※（事前にお申し込みを）17:00～
連 絡 先：　TEL　03−5963−6888　FAX　03−3906−9997

家族懇談会が『企業見学』当事者が行動しやすい環境に

10 月 31 日の家族懇談会では、田端にある特例子会社の第一生命チャレンジド株式会社の見学を行いました。社名で分かる通り、生命保険会社である第一生命が障がい者雇用のために作った特例子会社で、今回訪問させていただいた事業所が本社に当たります。

本社では、主に事務業務を担っており、全国の各支店から名刺や表彰状等の依頼に応じての印刷や、親会社である第一生命のコールセンターと隣接して、お客様から問い合わせに応じて必要書類を作成して発送する書類発送業務、書類のデータ入力等を行っておりました。その他、近隣の第一生命オフィスの清掃も担当していたり、書類発送で入院等の給付金請求時に折り鶴を同封しているそうで、この折り鶴も社員の業務として 1 つ 1 つ丁寧に毎月 6,000 羽折られているそうです。折り鶴の数に驚くと共に、お見舞いとして鶴を入れるというのも生命保険会社ならではの取り組みにも感心いたしました。



そして、今回の見学では、名刺や表彰状の印刷業務を行っている印刷グループの見学と、実際に働いている従業員の方からお話をお聞きしてきました。まずは見学ですが、業務の１つ１つが見える形にされており、見学する側にとってもとてもわかりやすくなっていました。業務を詳しく知らない側にもわかるということは、実際に業務を行っている方々にはとても安心して業務に取り組める環境が整えられており、自分たちで行動しやすい環境になっていると感じました。後半は、インタビュー形式で実際に働いている方からの体験談をお聞きしました。

お話して下さった社員さんは精神障がいをお持ちの方で、体調の悪い時も経験しながら今年で勤務を始めて8年目になるそうです。対人関係で体調を崩された経験や、体調不良による休職を経て現在“仕事が楽しい”と思えているということをお話して下さいました。働きながら体調が悪くなっても、しっかりと療養すれば、また仕事の世界に戻れるということをご家族の前でお伝えいただけたことが今回何よりの収穫になったと思っています。

体調悪い時は療養して復帰も

わくわくかんの中での講義形式だけでなく、時には外に出て、実際に見ていただく情報提供も新鮮だと感じたので、引き続きご家族のご要望に沿えるような企画をして参りたいと思います。今後とも参加いただければと思っています。　(Y.S)

---

11 月はたらっくす報告

11 月のはたらっくすは 11 日（土）に行われ、3 名の参加でした。参加者の進路や、受けられているヘルパー講習の話等で盛り上がりました。

私達の日本の一般社会を見渡すと、働く事は当たり前です。私達が余りに「私達精神障害者も働こう！」と運動したがために「働く事が最終目的ではない」等と公言する当事者の人もいます。しかし、私達はそんな事は百も承知で言っています。よくある「最近、景気はどうですか？」と仕事面を当たり前に訊かれた時に、スムーズに返事が出来る仲間が沢山いれば良いなぁ、と思います。

次回のはたらっくすは 12 月 9 日（土）の 16～18 時にわくわくかんで開かれます。働いている方と、働きたいと思っている方が対象です。時間内のいつ来られても、いつ帰られても自由です。あなたの参加をお待ちしています。　(H,M)

1998 年 10 月 9 日第三種郵便物認可　　（毎月 3 回 8 の日発行）
2017 年 11 月 22 日発行　　SSKU　　増刊通巻第 5939 号

12／16　共同連関東ブロック結成へ

12 月 16 日、共同連の関東ブロック結成会議が横浜市開港記念会館で開かれます。

待たれていた共同連の関東ブロックが、埼玉のわらじの会や神奈川のシャロームの家の共同連参加を機に結成することになりました。

結成会議には、第一部で斎藤縣三共同連事務局長（わっぱの会理事長）が記念講演、続いて、あしたや共働企画（多摩）、わくわくかん（赤羽）、結の会（八王子）、やまぼうし（日野）、シャロームの家（横浜）、職場参加を進める会（埼玉）や群馬からの活動報告を予定しています。

第二部では、「共同連東京から関東ブロック結成へ」と題して、堀利和共同連代表が挨拶、続いてお祝いに駆けつける北海道ブロック、東北ブロック、東海ブロック、ニュー関西ブロックからの連帯が表明され、結成が宣言されます。

参加希望者は
共同連東京　kyoudourentokyo@gmail.com まで。

ひとりよりみんなで～I☆LOVE ひびき！～

投稿

現在、臨床心理士を目指して勉強中の日々を送っています。ボランティア響会（通称「ひびき」）で働き始めた昨年の秋は、通信制大学の心理学部で学び始めて１年経った頃で、臨床心理士志望者にとって定番の「カウンセラーになって開業したい」という目標を持っていました。「定年過ぎても食いっぱぐれなさそうだしぃ～♪」などと、今思えば軽く考えていたと反省しています。

そんなすっからかんの私の脳みそに気合いを入れてくれたのが、ひびきとの出会いでした。「心理学的に人を癒やす仕事」といえば１対１で密室にこもって、向かい合って話をして…というそれまでのイメージが、ひびきでひっくり返りました。

ひびきに通い始めて日が浅いメンバーさんの表情が日に日にやわらかくなり、話す言葉が増えていく。そこにあったのは、カウンセラーとの密室での会話ではなく、日々メンバーさんたちやスタッフとプログラムに取り組み、あいさつや雑談を交わし、感情や思考を伝え合う経験の積み重ねであり、グループが持つダイナミズムでした。時にはふざけ合い、時には衝突しそうになりながら、メンバーさん同士が互いに力を与え合い、成長をうながし合っていることに気づきました。その強力なパワーを秘めた輪の中に私も加えていただいていることに、心から感謝する毎日です。

これからもグループの中でメンバーさんたちといろんな物事を交わし合い、成長し合っていけたら幸せです。ひびきのみなさんに、少しでも何かお返しができたら。それが今の目標です。　(M.K)

（写真はひびきの花壇の花植え作業）

現場からのひとこと⑦

赤羽をさんぽ！！

「――じゃあ、散歩にでも行きましょうか。イオン行きましょう、イオン。」Ｋさんがそう言うと、それまで途方にくれていたスタッフさんが顔を見合わせた。

地下の事務所から這い出ると、空は秋晴れ。どこまでもすみわたっていて、清々しい空気に思わず目がくらむ。もともと、この日の交流会は上野散策の予定だったが、天候の悪化が予想されたため内容を室内レクに変更した――はずだったのだが。天はあおあおと高く、馬が肥えても文句は言えないような快晴であった。

そもそも今回の交流会は参加の応募が芳しくなく、当日都合をつけてくださった利用者さんがＫさんおひとり（！）となってしまったことで、スタッフさんたちは頭を悩ませていた。室内レクって言ったって、スタッフのほうが人数多いよ…どうしよう、ということである。

そんな時にＫさんご本人の口から飛び出したのが、冒頭の言葉であった。雨も降ってないし、体も動かせるし、スタッフさんも地上へ出られるしと、まさに渡りに船のナイスアイディアということで、即採用。土地勘のあるＫさんに引率してもらって、スタッフさん２名と私を含めた総勢４名が赤羽の街へとくりだした。

Ｋさんはとても健脚でいらして、あそこにお弁当屋さんがあるよとか、あれは清掃工場の塔だよとか、ムエタイを習得したタイ人は強いよなどといった情報を我々にレクチャーしながら、スイスイと赤羽を案内して下さった。そしてそのまま、おしゃべりしながら目的のイオンをひととおり流し、帰りは別ルートをぐるっと回って事務所へと戻る。１時間ちょっとの散歩はこうして終わり、今回の交流会はお開きとなった。

Ｋさんもさすがにすこしお疲れの様子だったが、普段の面談ではなかなか出てこないお話もうかがえたりしたそうで、体調面や時間に気を配れば、たまにはこういうのもいいんじゃないでしょうか。利用者さんやこの街の違った顔が見えてくるかも？　【就労支援センター実習生 T】

1998年10月9日第三種郵便物認可　　（毎月3回8の日発行）
2017年11月22日発行　　SSKU　　増刊通巻第5939号

労働者協同組合の果敢な事例－アメリカの社会的事業所－

リバリック・ウィンドーズの解雇争議から工場を占拠した後に労働者協同組合として再建したことで知られるレア・フリードさんの闘いやレイバー・ノーツ編集長のジェーン・スローターさんの実践的な報告が11月15日、第95回社会的企業研究会として明治大学で開かれた。

レア・フリードさん

ジェーン・スロータさん

興味深かったことは、リーマンショック後の解雇にあう移民労働者たちが労働者協同組合をつくって職場を継続的に続けられるように闘っていることである。その意味では北米・南米に広がる排除にあう人たちの社会的事業所といえるかもしれない。

アメリカには労働者協同組合の法律はない。全米には協同組合は4万ぐらい存在し、労働者協同組合は3～400ほど存在するという。登記は州でできるため46%はしているが、4分の1は有限会社、他は非営利組織という。

興味深いのは労働運動との連携の深さである。労働組合は話し合いが得意なので全体で決め、労働協約にする特色がある。

労働者協同組合の特徴は本来「出資・労働・経営」が三位一体のはずであるが、ここではなんと出資がない。アルゼンチンなどでも回復工場という名でよばれているとのことだ。

わが国でもこの分野は未成立だが、官僚たちが雇用労働しか認めないため、法制化にあたって協同労働から経営を外すことの働きもあるが、それならば労働に特化したアメリカ型も全員参加型でおもしろい。

日本でも企業倒産から自主管理する労働者協同組合を生んだ時代があるが、移民労働者など非正規雇用と不安定雇用で解雇に苦しむ人たちには、就労確保の有力な方法だと感じた。

共同連の「次世代研修」に参加して

9月1～2日に行われた共同連全国大会in滋賀では、東日本大震災の復興や、東北のカキ産業などをはじめ、地域の困りごとを地元の人たちと解決していく事業が紹介され、それはそれは夢の様な話をたくさん聞かせて頂いた。9月中旬には次世代研修に参加しました。滋賀県で語られた様な事業に立ち上げから参加させてもらえると想い、私にとってそんな嬉しい話はなかった。

研修1日目、まずはわっぱで予定されている新規事業の説明があった。内容は、資源カフェ事業。愛知県津島市で浅井氏が成功した事業をモデルにしたもので、それは半径2ｋｍの住民が資源となるゴミを分別・洗浄し自家用車で持って来るということだった。私が真っ先にイメージしたものは、自家用車を所有し、ゴミを分別・洗浄する良識のある方たちの集うカフェ。とてもキラキラしていて、私の住む世界とは別世界に感じた。

私の地元では、貧困家庭の子供が満足に食べる事が出来ず、夏休みを経て2学期に登校する際は痩せ細ってしまっている。滋賀県で聞いた「地域の困りごとを地元の人たちと解決する事業」の話に夢心地だった私は、資源カフェの話に若干の動揺を覚えた。

2日目は、次世代メンバーだけで「新規モデル事業」の案を出しあった。中には「事業内容を地域のニーズから引出して検討する方法もある」との声があったが、何の下調べもしていない状態ではそれも適わず、思いつきの案を出しあう形になった。でもそこは熱意のある共同連メンバー。東京オリンピックを見据えた民泊事業や、後継者不足で困っている農家の継承、どれも面白そうな企画が次々に飛び出す。そして様々な案に共通していえる事は、「みんなが集う場所造り」が根底にある。わくわくかんのフリースペース復活を密かに望む私にとっては、それには大賛成！

資源カフェや次世代新規モデル事業の目的の多くは「地域の障害者の働く場をつくる」ことなのかもしれない。もちろん、それはブレてはいけないとても大事な目的だ。ただそれでは、最賃がもらえる福祉事業所とイメージが重なってしまう。障害あるなし関わらず、地元の人たちと一緒に働くには、共通の目的「地域の困りごと」なのではないのだろうか。資源カフェでは、夏休みに水道水で空腹をしのぐ小学生の腹は膨れない。

（A.N）

1998 年 10 月 9 日第三種郵便物認可　（毎月 3 回 8 の日発行）
2017 年 11 月 22 日発行　SSKU　増刊通巻第 5939 号

障がい者芸術は＜私を外に開く＞

自然農園の健康野菜で知られる㈱ECA が主催する日米障がい者作家展「第 2 回心の言葉」が飯田橋で開かれた。

こじんまりとした作品展だが、宗像リエの「ひだまりのなかで」（左下）は＜閉じこもっていた私を外に開いて＞くれた優しい顔がアップされていてあったかい。新聞と雑誌のコラージュだ。中村勇の「カリブ海」は筆ペンとパソコンで原色ゆたかな豪快な筆致が迫る。

まどかの「わずかな希望」（右上）は水彩絵の具でやわらかなタッチ、健康な歓喜があふれていた。

彼女がわくわくかんに通っていた時代には北とぴあで個展を開かれ、画風も時代と共に変化したのを見てきたが、今回は＜生きる＞よろこびがまぶしい。具象画に見えるがよく見ると左上にもう一つの顔が見える。ご本人に尋ねるとなんと幻聴とのこと、それも心地よい、やすらぐ空間とのことだ。

主宰する小野内裕治さんは「コミュニケーションに困難を抱え、その手段を模索している障がいを持つ人々にとっては特に、芸術は生活の中で決定的な役割を果します。芸術によって自己認識を高め、自信をつけ、社会参加に対する障壁を打ち破ることができる」と語る。アルコール依存症で精神科に入院した人もいるが、それを感じさせない個性豊かな作品が並んだ。絵の世界にそれぞれユートピアがある。

✿まどかさんからヒトコト✿

ECA 日米グループ展に２回とも選ばれて、それだけでなく ２ 回とも絵が売れて、多くの方に感謝の気持ちでいっぱいです。『作品は選ばれる、だから描いて』ー。絵を描いている段階で、こういう未来に向かってはげますような、幻聴が聴こえました。そして本当にそうなりました。こういったことは、８年前から私には日常茶飯事ですが、一般的に、いい内容が聴こえるのは珍しいことのようです。

今、特例子会社で、フラワーアレンジのお仕事も週５日 30 時間でさせていただいています。よく、「まだ幻聴が聴こえてるのにすごい」と言われます。私は無意識ですが、幻聴と折り合いをつけ、大人みたいにうまく共存してしまっているようです（笑）。

また「リボン便り」でいいご報告ができたらいいです。３回目の日米グループ展はまた２年後 にあります。

就労支援センター北わくわくかん

登録者（2017 年 10 月末）722 名
就職者 ３名（配送補助、事務、警備）

先月　ご協力いただいた皆様

北区障害福祉課・北区健康推進部・北区社会福祉協議会・北区障害者福祉センター・ハローワーク王子・池袋・飯田橋・東京障害者職業センター・東京都障がい者就業支援事業所の会・あしたや共働企画・NPO 法人やまぼうし・シャロームの家・わらじの会・職場参加をすすめる会・東京コロニー太田工場・わっぱの会・東京しごと財団・町田の丘学園・㈱ECA・避難の協同センター・企業組合あうん・社会的企業研究会・日本福祉教育専門学校・戸田中央看護専門学校・彰栄リハビリテーション専門学校等、

多くの方にご協力いただきました。

グループホームわくわくかん

現在、男性 2 名、女性 4 名が入居中です。男性入居者が入院中と帰省中のため、今回は事業のお話しです。11 月 13 日に初めて北区・荒川区合同による情報交換会が行われました。荒川区に興味深い事業がありました。この法人の理念は「障害者を納税者に！」とのことでホテル事業等も展開し、障害をもつ人の雇用の促進、また、地域民間の歴史的なお祭りにも大々的に参加しているとの事。詳しい事は何も聞けませんでしたが、そんな理念を掲げて運営している法人のグループホームとはいったいどんな所か。これからも他区のグループホームの方たちと共に情報共有していきたいと思いました。

▼編集後記▼

フクシマ原発事故からの避難者の住宅提供を打ち切って７か月が過ぎた。その当事者を支える「避難の協同センター」には、生活困難・経済困難におちいったり、生活保護を申請しても様々な理由で断られ、「福島に帰れ」と、立ち往生する人たちの SOS がいっぱい寄せられている。それに追い打ちをかけたのが山形県の雇用促進住宅の運営法人から８世帯の自主避難者が住宅の無償提供が終了したとして４月以降も住み続けていることに、退去と家賃の支払いを求める訴訟を起こされた。原発の被害者を被告人にするこの暴挙に、11 月 16 日国会内で緊急市民集会がもたれた。集会は、山形県の住宅明け渡し請求訴訟について福田健治弁護士と当事者の武田徹さんから怒りの訴えがあり、＜国は「原発事故子ども・被災者支援法」に基づき、避難者の「住まい」「暮らし」の保障を＞の８項目の要求のはいった声明を発した。

発行所　郵便番号 157-0073　東京都世田谷区砧 6-26-21　特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会　定価 100 円（会費に含む）

1998 年 10 月 9 日第三種郵便物認可　　（毎月 3 回 8 の日発行）
2017 年 11 月 22 日発行　　SSKU　　増刊通巻第 5939 号

（書評）堀利和編著：「私たちの津久井やまゆり園事件――障害者とともに＜共生社会＞の明日へ」（社会評論社）を読んで

「これは大変な力作、ここから津久井やまゆり園の、いや全国入所施設の改革へ」
：山本　勝美

＜入所施設の凄まじさに思わず息を呑む＞

一読して、なんと重みのある本だろうと思った。７０年代を彷彿とさせる堀さんのプロローグ、「母よ、殺すな！」との青い芝の糾弾を植松被告に差し向けるアナロジーの鋭さに驚く。続く入所施設の過酷な実態をえぐる諸論文、措置入院者・精神障害者の管理強化への赤信号。他方で当事者へのやさしさに溢れる地域実践の報告も。総体としていろんな立場の論旨と多様な情報に編集者の視野の広さがにじむ。次々と登場する書き手と資料とを辿っていくうちにこのような感銘を深めた。

この本は、大きく二部に分かれる。 第１部は重度知的障害者の入所施設における大量殺害をめぐる混乱と今後のあり方をめぐって。第２部は施設に乱入した男の事実経過と精神保健福祉法改訂案に抗する闘い。

前半では、重度知的障害者の家族会の「とにかく早く元の場所に元の施設を！」と切望する声、それに対し「いや、このような機会だからこそ地域移行へ。私の息子は地域社会で立派に自立しています」とアピールする先進的な当事者と家族との実践を紹介する。行政はその間で右往左往する。

とくに注意をさそったのは、ほかの施設に寄留を始めた利用者が、その惨たんたる境遇にいたたまれなくなって、親が元のやまゆり園に戻してと要望するが断られたという報告である。下には下がある実態が露呈する凄まじい事実関係に思わず息を呑む。こうして永年隠蔽されてきた入所施設群の悲惨な実態が今ようやく明るみに出た。

＜「真犯人は施設そのものだ！」＞

犯人はどうしてこんな残酷な行動を！と誰しもいだく問いに対し、違う！「真犯人は施設そのものだ！」という鋭い見解に直面する。半世紀にわたって身を持って入所施設を点検し続けてきた先駆者はこう指摘している。それに、インクルーシブ教育運動の無力な現状が優生思想を生み出したとする厳しい自責の言葉が続く。さらに福祉政策の先進国スウェーデンとの国際比較による日本福祉社会の未成熟性の解明。この事件は起こるべくして起きたと語っているのだ。

ところで事件発生により利用者の方々は突然やまゆり園から放り出され、いくつかの入所施設に分散されていく。、しかも今後の方針は全く見えない。高齢のご家族は戸惑いと疲労から「早く元の場に元の施設を」と訴える。これらの辛苦の状況は理解できる。だからこのような境遇の家族会を地域移行へと説得できるのは先駆的な地域移行を果たした当事者と家族の方の実践だろう。その声、実践成果をより効果的に伝える努力ではないかと感じた。

＜「精神病」との病名が不可解な事件を納得させる＞

第２部では、そもそも「精神病」という病名が不可解な事件を人々に納得させてしまう効力を持つという。私の見解だが、米精神医学会の診断体系（DSM）自体、身体医学体系をモデルにしながらも、変転し続けてきた荒唐無稽物だ。権力にどう利用されるかわかったものではない。

さてこの事件に乗じてその翌日直ぐに首相は国会でこの事件を取り上げ「精神保健福祉対策の再検討を行い、再発の防止を計る」旨唱えた。その日から措置入院経験者を管理するための法改悪攻撃が始まった。こうして今、障害者権利条約に謳われた本来的な精神保健福祉政策は進まぬばかりか、地域移行が一層疎遠になりかねない。それ故当事者集団や精神医療関係者、野党は総力を挙げて阻止の闘い組んできた。ただ他方で「人間らしく下町で」長年かけてひと同士の関わり合いを育ててきた「こらーるたいとう」の実践報告には心温まる。

＜豊富な経験と柔軟なスタンスの編集＞

総じて、重度重症知的障害者の置かれた状況、今後のあり方を巡る家族間の対立、不透明な行政、職員の実態、さらに植松被告の衆議院議長宛文書まで含めた正確な情報・資料、それに諸論稿の数々、全国の津々浦々から沸き上がってきた施設解体と地域移行の声をコンパクトに一冊に集約した編集は、堀さんの豊富な経験と柔軟なスタンスならではの成果として拍手を惜しまない。

（筆者は　東京都保健所心理相談員協議会会長
日本臨床心理学会運営委員会）